

## 財務担当役員メッセージ



宮崎 秀樹

取締役  
常務執行役員

### 2018年度の業績の振り返り

連結売上収益は4,967億46百万円(前期比17.7%増)、営業利益430億30百万円(同1.2%減)、親会社の所有者に帰属する当期利益311億16百万円(同6.4%減)、ROEは7.8%となりました。

主要な需要業界においては、自動車やタイヤ生産は中国の減速などによる影響を受け低調であり、半導体およびディスプレイ市場は需要が伸びるなど、まちまちの動きとなりましたが、こうした市場の動向に加えて、高機能材料の販売を伸ばしたことなどにより、各事業とも売上収益を伸ばしました。一方、営業利益は、合成樹脂事業およびデジタルソリューション事業は増益となり、ライフサイエンス事業は黒字化しましたが、エラストマー事業の減益の影響が大きく、全体としては微減となりました。

事業ごとに見ると、エラストマー事業では、低燃費タイヤなどの高機能タイヤ用溶液重合SBR(SSBR)の販売数量を伸ばしたことなどにより、売上収益は前期を上回りましたが、営業利益は、好調だった前期の利益が大きかったことに加えて、市況が低迷したことや固定費増などがあり、前期を下回りました。

合成樹脂事業は、当社グループ企業であるテクノポリマー株式会社と、三菱ケミカル株式会社と宇部興産株式会社の折半出資会社であるUMG ABS株式会社が事業統合したことにより、売上収益と営業利益が前期を大幅に上回りました。

デジタルソリューション事業では、半導体材料事業で最先端フォトレジストを中心に販売数量を拡大したことにより、売上収益は前期を上回りました。営業利益も、半導体材料事業の増益により、デジタルソリューション事業全体で増益となりました。

第3の事業の柱と位置づけるライフサイエンス事業については、KBI Biopharma, Inc. (KBI)の受託の増加やCrown Bioscience International (Crown Bio)の連結子会社化などにより、売上収益は前期を大きく上回り、営業利益は黒字化しました。

### 中計最終年度の業績見通し

グローバルな景気動向は不透明な状況ですが、主要な需要業界では、自動車生産やタイヤ生産はグローバルで前年割れが見込まれ、半導体市場は、足元の需要は低調ですが、通信の高速化、データ容量の増加

#### 2018年度実績

(単位:億円)

連結	売上収益	4,967
	営業利益	430
	親会社所有者帰属利益	311
エラストマー	売上収益	2,007
	営業利益	74
合成樹脂	売上収益	1,054
	営業利益	92
デジタルソリューション	売上収益	1,422
	営業利益	327
ライフサイエンス	売上収益	439
	営業利益	8
その他・調整額	売上収益	45
	営業利益	-70

## 財務担当役員メッセージ

などにより、今後回復が見込まれます。また、ディスプレイ市場は、液晶パネル生産は堅調に推移し、特に中国における生産が今後も増加すると見込まれています。

このような環境の下、2020年3月期連結業績見通しは、売上収益5,080億円(前期比2.3%増)、営業利益445億円(同3.4%増)、親会社の所有者に帰属する当期利益310億円(同0.4%減)です。

事業毎に見ると、エラストマー事業は、タイヤ市場の低迷が継続するものの、高機能タイヤ用SSBRの販売は着実に伸びるため、増収となり、一方でハンガリー工場立ち上げなどの固定費負担が増えることもあり、営業利益は減益となる見通しです。合成樹脂事業は、売上収益が前期並みですが、営業利益は採算改善により増益を見込みます。デジタルソリューション事業およびライフサイエンス事業は、堅調な市場を背景に、いずれも増収・営業増益となる見通しです。

### 資本コストおよび事業ポートフォリオについての考え方

資本コストについては、ROE8%以上を安定的に達成するとともに、できるだけ早い時期に10%台となることを目指しておりますが、2018年度は7.8%と若干8%を下回る結果となりました。2019年度は自己株式の取得を行うなど、8%以上の達成に努めてまいります。

#### 2019年度通期予想

		2018年度 実績	2019年度 上期見込	2019年度 下期見込	2019年度 見込	前年度比
連結	売上収益	4,967	2,520	2,560	5,080	+2%
	営業利益	430	215	230	445	+3%
	親会社所有者帰属利益	311	150	160	310	-0%
エラストマー	売上収益	2,007	1,000	1,010	2,010	+0%
	営業利益	74	27	28	55	-26%
合成樹脂	売上収益	1,054	510	510	1,020	-3%
	営業利益	92	50	50	100	+9%
デジタル ソリューション	売上収益	1,422	725	725	1,450	+2%
	営業利益	327	165	175	340	+4%
ライフサイエンス	売上収益	439	255	285	540	+23%
	営業利益	8	5	10	15	+92%
その他・調整額	売上収益	45	30	30	60	+34%
	営業利益	-70	-32	-33	-65	-

(単位:億円)

事業ポートフォリオについては、合成樹脂事業が事業統合し、また、ライフサイエンス事業の規模も拡大するなど、事業変革が進んでいます。

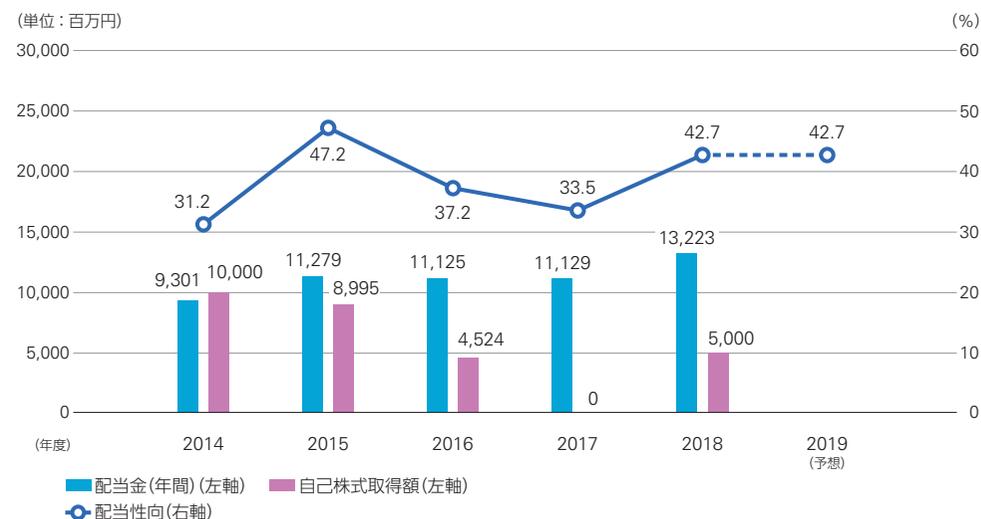
### 株主還元

株主還元につきましては、業績と中長期的な資金需要とを勘案し、株主の皆様への利益還元と会社の将来の成長のための内部留保とのバランスを考慮しながら決定してまいります。

中期経営計画「JSR20i9」の期間中においては、配当と自己株式の取得を合わせた総還元性向50%以上を目指しており、2018年度は配当に加えて自己株式の取得も行い、58.6%となりました。

2018年度の1株当たりの配当金は、第2四半期末配当金30円、期末配当金30円の年間配当金60円と、2017年度の1株当たりの年間配当金50円に比べて10円の増配としました。2019年度の1株当たりの配当金は、業績の見通しに鑑みて、第2四半期末配当金30円、期末配当金30円の年間60円を予定しています。

#### 株主還元推移



# 財務担当役員メッセージ

## 成長投資としてのM&Aの考え方や取り組みスタンス

当社は、長期的視点に立って研究開発の強化に努め、新たな事業展開などにより企業の競争力強化を図り、会社の業績を長期的に向上させることが最も重要な課題であると考えています。

特に、ライフサイエンス事業において、成長を加速させるためにM&Aの活用を進めてきました。2018年度は、製薬企業向けに医薬品開発プロセスの臨床試験前段階において創薬支援サービスを提供しているCRO(Contract Research Organization)であるCrown Bioを連結子会社化しました。本件を含めたこれまでのM&Aにより、ライフサイエンス事業における抗体医薬品を中心とした創薬から製造までの一貫したプロセス支援ができる体制を構築できました。

今後のM&Aについては、事業成長を見据えて、必要に応じて慎重に検討を進めていきます。

## 研究開発費に関する基本方針・実績・見通し

売上収益の5%程度を目安にしており、その中で、売上収益の1%程度を目安に次世代事業に充当しています。2018年度の研究開発費の実績は売上収益の5%となる249億円でした。

研究開発は今後の成長にとって非常に重要と認識していますので、事業の状況に応じて資源配分を見極めながら、適切な活用に取り組んでいきます。

## 設備投資に関する基本方針・実績・見通し

設備投資の内容としては、主に、事業成長のための生産能力拡大や、設備老朽化・耐震・安全対応などがあります。

2018年度実績は360億円と前期比で62億円減少しました。主な減少要因としては、ハンガリーに設立した合弁会社JSR MOL Synthetic Rubber Ltd.の工場建設費用が前期に比べて減少したことや、ライフサイエンス事業において、前期に実施したKBIおよびバイオプロセス材料であるAmsphere(アムスフェア)A3の生産能力増強工事費がなくなったことなどによるものです。

2019年度は450億円と2018年度対比で90億円の増加を見込みます。主な増加要因としては、半導体材料事業やライフサイエンス事業での生産能力の拡大や全社のデジタル変革に向けた業務(ERP)システムの更新などとなりますが、実行については経営環境を見ながら慎重に判断してまいります。

### 設備投資推移

(単位:億円)

	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度(予想)
設備投資	352	243	318	422	360	450



SSBRハンガリー工場(2019年4月完工)